

契丹大字解読の最前線

ブレーニィ・オボー碑文に挑む

武内康則

たけうち やすのり / 日本学術振興会特別研究員 (大谷大学)、AA 研共同研究員

目の前にあるこの碑文には、
およそ千年前に使用された契丹文字という
未解読文字が刻まれている。
碑文は我々に一体何を伝え残そうと
したのであろうか。

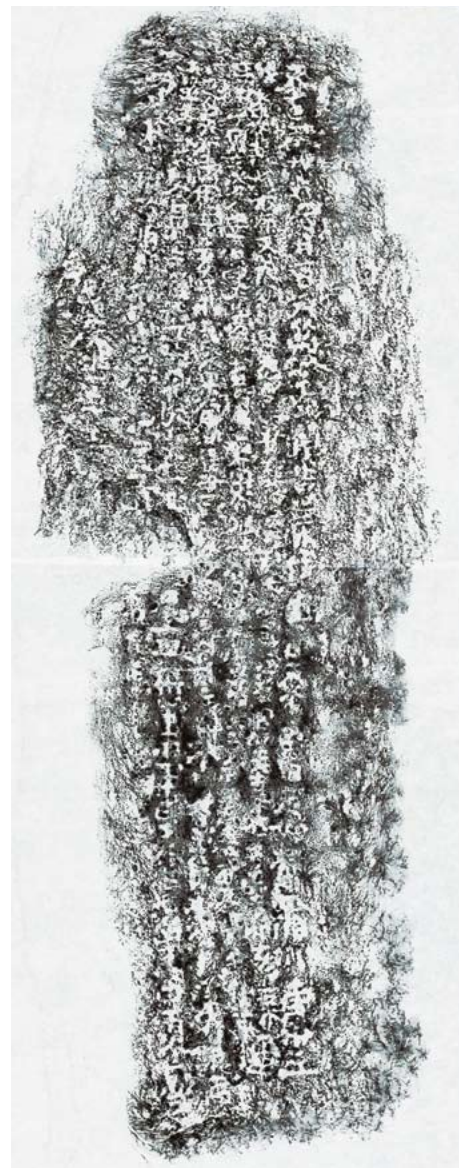
未解読文字への挑戦

未解読文字の解読は、言語学の研究分野の中で最もロマンにあふれた一つであろう。シャンポリオンによるヒエログリフ (エジプト象形文字) の解明や、ローリンソンによるベルシニア楔形文字の解読など、劇的なエピソードは大変面白く興味が尽きない。アジアの未解読文字の一つ、契丹文字は、遼 (916-1125年) を建国した民族—中国の史書では「契丹」と呼ばれた—が、自らの言語を記すために作成した文字である。タイプの異なる「契丹大字」と「契丹小字」と呼ばれる2種があり、どちらも使用者が絶え読める人がいなくなったが、まさに現在研究者によって解読が進められている。契丹文字の解読のために研究者たちは、関連する漢文資料との比較、統計を用

いた文字音価の推定、6世紀から約2世紀間にわたってモンゴル高原などを支配したトルコ系の遊牧民族突厥^{とっけつ}が用いた突厥文字との比較など、苦心に苦心を重ね、その長年の研究によって着実に解読は進んできた。しかしいまだに、書かれている内容を読み解くのが困難な部分も多い。契丹語はモンゴル諸語と関係していると考えられているものの、現在伝わっている諸言語とは大きく異なっていた可能性がある。理由の一つは、契丹語の語彙の多くが、我々の知るモンゴル諸語のそれと異なることだ。ここではモンゴル国で新たに発見された碑文をもとに契丹大字解読の最前線について紹介したい。

ブレーニィ・オボー契丹大字碑文の調査

モンゴル国にて調査中の松川節教授から、同国南部ドルノゴビ県のブレーニィ・オボーで契丹大字が記された新たな碑文が見つかったとの連絡を受けたのは2010年の8月であった。その後碑文の写真や拓本を見る機会はあったが、それらから文字を判読するのは困難であり、是非とも実見調査を行いたいと考えていた。幸いなことに、ウランバートルの国立博物館に移送されたこの契丹大字碑文を、2011年8月に調査する機会に恵まれた。その碑文は博物館の1階に、突厥時代の文物や遼の時代の



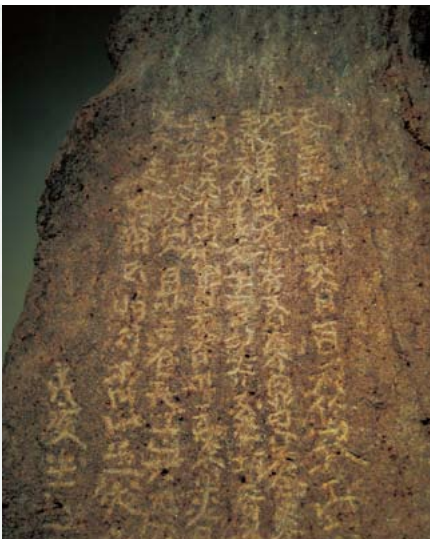
ブレーニィ・オボー碑文拓本。

他の文物とともに展示されていた。今回調査を行った碑文には契丹大字のみが刻されており、残念ながら漢字や突厥文字が併記された対訳資料ではなかった。そのためこの碑文は、契丹文字研究におけるロゼッタストーン (異なる言語と文字で、近い内容の文章が刻まれ、ヒエログリフの解読に決定的な役割を果たした碑文) とはならなかった。しかし、契丹小字と比べ資料の少ない契丹大字研究においては、大変貴重な資料であると言える。

自然石に加えて磨滅しやすい環境のため文字の判読は容易ではないものの、1文字が3~4cmで1行当たり30~40字ほどの文字が7行にわたって刻されているのがわかる。さまざまな方向からペンライトで光を当て、文字が刻まれた溝を指でなぞり、さらには拓本と比較しながら刻まれている文字を推定していく。文字の判読も単にこの資料の観察によってなされるわけではない。これまでに出土した資料と比較することによって前後の文脈を考えながら文字を同定していく必要がある。このよう

モンゴル草原。この草原のどこかにまだ見ぬ契丹文字資料が存在するのだろうか？





プレーニイ・オボー碑文上部写真。



モンゴル国立博物館に展示されたプレーニイ・オボー碑文。

な作業を通して一番右の行がどのように書かれているのかがわかってきた。

日付の文字の同定

図1左端の画像は調査の際に撮影した碑文の冒頭9文字であり、その右側は調査によって再構成した該当部分の文字の推定図である。「月」や「日」など漢字と似た文字からわかるようにこれは日付を記したものであることがわかる。どうやら「清寧四年（1058年）八月一日」と書かれているようである。すでに研究されている「耶律習涅墓誌」にも図2に見られるように「清寧九年辛卯正月二十八日」との表現を見ることができ、文字の同定の際に参考にできた。しかし文字は判読できたものの、これらの文字がどのように発音されていたかを明らかにするためには、他の言語資料や先行研究を検討しなければならない。

契丹大字音価の推定

年・月・日を意味する契丹大字の意味に関しては、先行研究によって比較的早い段階から推定されてきた。しかし、意味が判明しただけでは解読が完了したとは言えない。モンゴル諸語と比較するためには、これらの語の「発音」も明らかにすべきである。これらの語を契丹語の使用者がどのように発音していたかを解明するには、漢字や、契丹小字で記録された資料を参照する必要がある。『遼史』などの漢語の文献中には、契丹語の語彙が漢字による音写の形で記録されている。残念ながら、基礎語彙の漢字音写は少なく、固有名詞のそれが多いために、契丹語の全容解明には量的にも質的にも物足りないものであるが、幸いこの碑文に見られる「月」や「日」などの語の発音は記録されている。それによると、月を意味する語は「賽啾呪」(sai i ər) あるいは

「賽離」(sai li)、日を意味する語は「捏啾呪」(nie i ər) あるいは「捏離」(nie li) と音写されている(カッコ内はいずれも当時の中国語の発音)。これらを根拠にして、それぞれsair, nairと契丹人が発音していたことを推定することが可能となる。しかし、これら以外の語については漢字音写が伝わっていないために、同じ方法ではどのように発音されていたかを推定することはできない。しかも、契丹大字の資料は小字と比較して絶対数が少ないために、単に大字資料を分析するだけでは解読できる範囲が限られてしまう。

新たなアプローチ

近年進められている契丹大字解読へ向けた新たなアプローチはそれらの問題を克服できる可能性がある。従来は表意文字が主体であると考えられてきた契丹大字であったが、近年の研究によって、実際には多くの表音文字

が含まれていることが明らかになり、大字の研究方針も、意味の推定ではなく音価の推定に重心が置かれるようになった。大字によって記された言語と小字によって記された言語を同一のものであると仮定し、それらと比較することによって、すでに明らかにされている小字の音価を対応する大字へと当てはめることで大字の音価の推定が行われ始めたのである。例えば、年号の「清寧」は契丹小字では^{𐰺𐰽𐰸}と書かれる。契丹小字の研究は大字よりも進んでいるために、これらの文字の音価はほぼ明らかにされており、au as-arと読むことができる。したがって、それに相当する契丹大字の^{𐰺𐰽}も同じ発音を表示していると考え、^𐰺をas、^𐰽をarと推定することができるわけである。(^𐰺、^𐰽の発音についてはまだ議論の余地がある。)同様の作業を地道に積み重ねることによって、先の推定図に示した文字列の音価を推定することができた。本碑文では、日付を解読することができるほか、ところどころに音価の判明している文字を確認できる。しかし判読が困難な部分は多く、さらなる解読には時間がかかりそうである。他の契丹大字資料との比較研究を進めることが解読を進めるカギとなるであろう。

解読の将来

モンゴル国でのプレーニイ・オボー契丹大字碑文の発見に続いて、ロシアでは契丹大字が記された冊子本が発見されるなど、契丹文字の資料は着実に増加している。さらに近年は契丹文字の研究者の数も増え、これまでには見ることができなかったようなスピードで研究論文が発表されている。近い将来に契丹文字研究が一層の進展を見せることは想像に難くない。

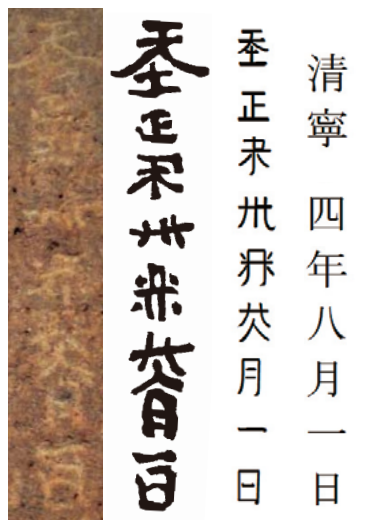


図1 プレーニイ・オボー碑文の冒頭とその意味。現段階の推定音：au? asar dur ai naim sair mas? nair。

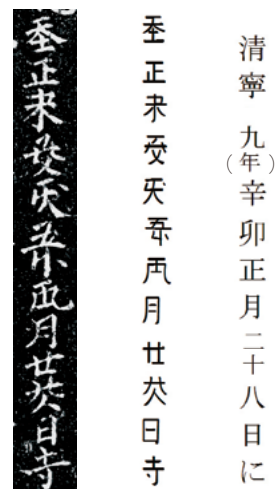


図2 耶律習涅墓誌に見られる日付とその意味。「年」を表す文字が省略されている。